

# 市史通信

## 第3号

【発行日】2008年11月22日  
 【編集・発行】横浜市史資料室  
 〒220-0032  
 横浜市西区老松町1番地  
 横浜市中央図書館・地下1階  
 【電話】045-251-3260  
 【FAX】045-251-7321  
 【E-mail】  
 gy-sisi@city.yokohama.jp  
 【ホームページ】  
<http://www.city.yokohama.jp/me/gyousei/housei/sisi/>



戦後の海岸通り 1946(昭和21)年11月 中央の横浜税関に米第8軍司令部が置かれた。  
 (米国立公文書館所蔵)

### 【目次】

- 展示会「横浜の戦争と戦後」
- 昭和戦前期の横浜と米海軍
- 横浜市民博物館の設立
- 写真で見る昭和の横浜②  
 瀬戸ヶ谷古墳の"発見"
- 所蔵資料紹介
- 市史資料室たより

## 展示会

### 「横浜の戦争と戦後」

八月一五日を期して、横浜市史資料室では「横浜の戦争と戦後」と題する展示会を開催した。市史資料室所蔵の戦中・戦後の写真を中心としたパネルと、軍隊手帳や兵士の手紙、戦後復興の象徴としての日本貿易博覧会関係など一部現物資料をあわせて六五点を展示した。ここでは改めて展示の主旨を述べると共に、展示で充分に紹介できなかった点について補足しておきたい。

### 戦争と横浜

そもそも戦争は否応なく一般市民を巻き込み、暮らしにも大きな影響をもたらすものである。戦時中の耐乏生活から戦後の食糧難まで、市民は苦しい生活を強いられ、また空襲では、多くの犠牲者を出し、暮らしの場そのものである街も破壊された。そのように市民生活を大きく揺るがした戦争を、横浜の歴史との関わりのなかで考えてみると、それは具体的にどのようなものとして現れてくるのだろうか。

まず思い浮かぶのは、一九四五（昭和二〇）年五月二九日の横浜大空襲であろう。ようやく関東大震災の被害から復興を成し遂げ、一九二九（昭和四）年四月に復興祝賀会を開催してからわずか一五年、空襲によって中心市街地

は再び破壊され、多大な費用と年月を費やして戦災復興が図られることになった。もう一つ、多くの市民が体験した学童疎開や勤労動員も、戦争を語る際に忘れることはできない。こうした市民に直接関わりの深い空襲や疎開・勤労動員については関心も高く、調査も進んでいる。すでに、『横浜の空襲と戦災』（横浜市、一九七五年）一九七七年）や『横浜市の学童疎開』（横浜市教育委員会、一九九六年）などが刊行され、多くの資料や体験記が紹介されている。

一方、戦争に直接従事した軍隊や基地と横浜の関わりは、どうであったのだろうか。横浜出身の兵士はどのような体験をし、犠牲を出したのか、横浜にはどのような部隊や軍施設があったのか、そしてそれらの実態はどのようなものだったのだろうか。その概略は、『横浜市史Ⅱ』1巻下（一九九六年）でも紹介している。しかし、空襲や疎開などに比して、横浜の軍隊と基地に対する関心はこれまで決して高かったとはいえない。そこで今回、横浜と戦争をテーマとして展示会を開催するに際して、改めて横浜の軍隊と基地に焦点を当てることにした。

もう一点、横浜と戦争を考える際に見逃せないのが、戦後の占領である。占領もまた、戦争の帰結であったからである。とくに占領下の横浜は、市中心部の多くが接収され、そこに、日本占領の中心となった米第八軍の司令部



出征兵士歓送風景(西谷町) 1938(昭和13)年8月  
横浜の空襲と戦災関係資料(小室清氏提供)

をはじめ米軍部隊の司令部や各種施設が置かれた。横浜にあった旧日本軍施設の多くも接収された。そのため、横浜の基地に関しては、旧日本軍から米軍まで、戦前・戦中・戦後の連続性のなかで考える必要があるといえよう。そのような意味で、今回の展示会のタイトルを「横浜の戦争と戦後」とすることとしたのである。

今回は、展示で紹介できなかった部隊や基地について、現在わかっている範囲でその概略を紹介しておきたい。

### 横浜の兵士たち

まず最初に、横浜出身兵士の部隊について、簡単に述べておこう。横浜には、連隊区司令部が一九四一(昭和一六)年まで置かれていなかったため、甲府連隊区司令部が徴兵事務などを所管していた。そして、招集を受けた兵

士の多くは、甲府の歩兵第四九連隊に入営した。この他、横浜出身の兵士が配属された部隊には、歩兵第一四九連隊、歩兵第二一〇連隊、歩兵第二二〇連隊などがあった。もちろん、これ以外の部隊や海軍部隊にも横浜出身者がいたが、ここではそれらの代表として上記連隊について紹介することとする。

横浜から出征した軍人・軍属の戦没者数は二万人以上を数える(戦没者数に関しては、三ツ沢慰霊塔合祀者名簿をもとにした『横浜市史Ⅱ』1巻下の記述による)。各連隊はいずれも激戦地に派遣され、大きな犠牲を出した。第一師団隷下の第四九連隊は一九三六(昭和一一)年以来満州にあり、国境警備などに当たっていた。その後、一九四四(昭和一九)年に至って第三大隊がグアム島に派遣され玉砕、第四九連隊本隊も同年フィリピンレイテ島で、米軍を迎え撃って、激戦のなか大きな犠牲を出した。同年末には、総数二五〇〇人から残存兵四〇〇人余りとなり、翌年五月には全滅に至った。八月一日の降伏の際に、生き残っていたのはわずか九〇人余りであったという(以下、各連隊の動きについては『甲府連隊写真集』国書刊行会、一九七八年などによる)。

第一四九連隊は、一九三七(昭和一二)年の日中戦争勃発に際して、甲府の第四九連隊の留守部隊によって編成された。上海方面に派遣された同連隊



県立第1高等女学校教諭の学校葬 1938(昭和13)年  
横浜の空襲と戦災関係資料(県立平沼高等学校提供)

も、二年半におよぶ中国戦線の激戦のなか、戦死者一四〇〇人という大きな被害を出している。

第二一〇連隊(第三一師団)・第二二〇連隊(第三五師団)は、共に一九三九(昭和一四)年に編成され、中国北部に派遣された。一九四四年、共に南方転進を命じられ、第二一〇連隊はマニラへの途中輸送船が魚雷を受けて沈没、全滅に近い被害を受けた。第二二〇連隊も、ニューギニアに向かう途中セレベス島近くで輸送船が魚雷を受けて沈没するが、多くが救助されてニューギニアに上陸、終戦を迎える。

以上のような各部隊の動きを反映して、横浜市出身者の戦没地は「南方」が最も多かった。たとえば、市内で最も戦没者の多い鶴見区の内訳を見ると、

南方が九四七人、内フィリピンが四二一人、ニューギニアが一七七人となっている。また、中国大陸の戦没者も三七九人を数え、一九三七年の日中戦争勃発から一九四一年末までに一〇〇人、一九四四年には六九人、一九四五年には一三四人(内八月一日以降が七〇人)の戦没者を出している。

町をあげて送り出された出征兵士には、このように過酷な運命が待っていたのである。そして、残された家族もまた、空襲に直面することになった。

### 横浜の軍施設

次に、横浜に配置された部隊と基地について述べることにする。横浜には大きな軍事基地はなかったが、横須賀鎮守府に隣接していたため、海軍の工廠や病院などが存在していた。その他戦時中には、横浜港の守備隊や哨戒部隊といった海軍の部隊も配置され、日吉台の地下壕には連合艦隊司令部などが置かれた。また、横浜は京浜地区に對する空襲の進入経路に当たっていたため、一〇ヶ所を超える高射砲陣地が築かれ、陸軍の守備部隊も配置されていた。こうした軍の施設は戦後、多くが米軍に接収され米軍施設となった。

今回は、これらの軍施設の内海軍施設と部隊について簡単に紹介した後、高射砲陣地について戦中から戦後の経緯を述べてみたい。

海軍の施設は、横須賀鎮守府に近いという背景もあって、多くは現在の戸

塚区から栄区・金沢区にかけて所在していた。現戸塚区の原宿町には、一九四三（昭和一八）年六月戸塚海軍病院が開設され、軍医学校（衛生学校）が併設された。現在の栄区の小菅谷町には一九三八（昭和一三）年頃、第一海軍燃料廠が開設された。船舶燃料の他、航空燃料の開発・実験を行っていたという。現在の本郷台駅周辺の広大な敷地を占め、戦後は米軍に接収され大船PXとなっていた。

現金沢区域には、さらに海軍施設が集中していた。なかでも代表的なものは、横浜海軍航空隊と第一海軍技術廠支隊であろう。横浜海軍航空隊は、一九三七（昭和一二）年一月三日に開設された飛行艇の航空隊で、富岡に兵舎と格納庫があった。跡地は戦後長く米軍に接収されていたが、現在は富岡総合公園などになっており、当時の名称が入った石門が残っている。同部隊もまた南方の激戦地に派遣され、一九四二（昭和一七）年にソロモン諸島で玉砕したという。

第一海軍技術廠支隊は、一九四一（昭和一六）年四月に海軍航空技術廠支隊として、六浦町・釜利谷町にまたがって開設された。主に、航空兵器の技術開発に当たる施設であった。その広大な敷地は、現在東急車輛と横浜市立大学となり、釜利谷第二公園に記念碑がたっている。記念碑の記述によれば、当廠で業務に当たったものは、軍人の他、文官・工員あわせて一万人に及ん

だという。さらに金沢区には、六浦町に海軍技術廠の工員養成所（跡地は関東学院大学となっている）や海軍第二工廠造兵部谷戸田注填場（池子弾薬庫）などの施設もあった。

この他、磯子区も含めた横浜市南部の帯には、海軍関係の民間工場も多く、一大軍需産業地帯を形成していたのである。

### 黒潮部隊と横浜港湾警備隊

一方、市中心部には戦時中、いくつかの実戦部隊が配置されていた。その一つは、海軍の第二二戦隊、通称黒潮部隊である。設立は、一九四一（昭和一六）年一〇月。横浜港を拠点とし、山下町に司令部を置いて、近海の敵飛行機や潜水艦の洋上哨戒を任務としていた。

しかし、一五〇隻ほどあった監視艇・哨戒艇の多くは、主に遠洋漁船を徴用して改造したもので、戦闘能力は低かった。したがって、敵を発見すると同時に攻撃を受け、沈没に至ることも少なくなかった。たとえば、一九四五（昭和二〇）年四月中の沈没一八隻、座礁一隻、五月中の沈没一一隻、座礁一隻と、続けて大きな被害を出している。人的被害は定かではないが、同年四月現在の人員四七六三人が、六月現在では四四七五人と三〇〇人近く減っている（いずれも「戦時日誌」による）。

次に、横浜港湾警備隊は一九四四（昭和一九）年九月に設置された。川崎か

ら横浜・横須賀にかけての港湾施設と、造船所などの海軍関連重要施設の警備に当たった。また、徴用商船を武装改造して兵員輸送にも当たった。

本部は横浜生糸検査所に置かれ、兵員は橋隊・桜隊に編成され、それぞれ山手女学院（現フェリス女学院）・横浜共立学園を兵舎とした。約二六〇〇人の部隊であったが、一九四四年一〇月の戦闘のみで、四〇〇人程の戦死・行方不明者を出している。兵員輸送の際であろうか、とくに南方での被害が多く、「戦時日誌」によるとほとんどが行方不明、即死あるいは死体を収容し得なかったものとなっており、戦闘の悲惨さがうかがえる。

### 高射砲部隊

こうした海軍部隊に対して、陸軍の実戦部隊である高射砲部隊について、以下戦後までの変遷という視点もふまえて具体的に見ていきたい。

高射砲部隊の編成は、大正期後半に始まるが、本格化するのには航空兵力が発達する昭和期に入ってからである。とくに一九三七（昭和一二）年に防空法が制定され、日中戦争が勃発した後一〇月に施行されるに至って、軍と官民が一体となって防空体制の整備が急がれることになった。

一九四〇（昭和一五）年には、防空部隊を指揮する東部軍司令部が置かれた。「国土防空強化ニ関スル件」が、翌一九四一年一月に閣議決定され、さ

らに防空体制が強化されていく。同年七月に各地の軍司令部を統括する防衛総司令部が新設され、八月、要地上防空部隊を展開することが決定された。防空上の最重要地域とされていた京浜地区には、東京を中心とした北・東・西の三地区と川崎地区・横浜地区に、高射砲部隊と防空部隊からなる各地区隊が置かれた。防空部隊には、この他聴測隊や防空気球隊・防衛通信隊も編成された。

その後、空襲が本格化した一九四四（昭和一九）年一二月、東京で高射第一師団が新たに編成される。横浜には高射第一一七連隊が置かれ、横浜の高射砲部隊もその下に統合されることになった。連隊本部は野毛山に置かれ、市内の本牧・岡村・仲尾台・瑞穂・星川・野毛山・菊名・篠原・子安台・三ツ池・高田・保土ヶ谷・間門・宮根・池辺に、高射砲陣地が配置された。しかし、これら陣地の構築時期など詳細は必ずしも明らかでない。そこで今回は、公園に配置されたものについてその経緯を紹介してみたい（公園に関する記述では、『横浜の公園史稿』横浜市公園緑地行政資料調査会、二〇〇三年を参考にした）。

### 野毛山の高射砲陣地

まず、これらの内最も最初期に構築されたのが野毛山である。野毛山公園は、そもそも震災復興事業の一環として、山下公園・神奈川公園と共に国施



野毛山公園での高射砲陣地構築作業 昭和16年8月  
清水信資料(横浜市史資料室所蔵)

本貿易博覧会の会場を経て、野毛山遊園地として再整備され、現在に至る。

野毛山に突如高射砲陣地が構築された経緯は、防空部隊展開にともなうものであったこと以外詳らかではない。一方、その背後では、防空体制の強化にともなう防空緑地・防空公園の計画が進んでいた。震災復興事業が一段落した後、東京を中心とした周辺に大緑地帯を設けるという考え方が登場し、一九三七(昭和一二)年の防空法の制定によってこれが防空緑地計画へと展開されていった。

極的防空陣地トシテ利用セントスルモノ」と明記していた(『神奈川県都市政策課、策史料』神奈川県都市部政策課、一九八五年)。想定されていたその具体的な内容は、高射砲・防空・聴音・防空気球などの陣地であった。

### 防空公園

県が担当した防空大緑地に対して、市が直接に計画、造成したのが防空公園である。一九四〇(昭和一五)年から一九四三(昭和一八)年の間に、市内一五ヶ所の防空公園の都市計画決定がなされた。しかし、この後、国土の防衛・防空に関連のない公園整備は中止されることになり、直接軍の施設となつたものが多かった。一五ヶ所の内、岸根・岡村・子安台の各公園には高射砲陣地が築かれた。それぞれの軍による接収時期は、岡村公園が一九四三年三月、岸根公園が同年七月、子安台公園が翌年七月となっている(渉外部資料「高射砲陣地関係書類」)。子安台では最近、道路工事の現場から当時の高射砲の砲身と砲弾が発見された。

め米軍によって接収された。正式な接収時期は、岡村公園が一九五一(昭和二六)年一月二七日、岸根公園・子安台公園が同年四月一日となっている(高射砲陣地関係書類)。そして、朝鮮戦争の停戦を受けて、一九五五(昭和三〇)年末に至って米軍は撤収、接収解除となったが、高射砲陣地は自衛隊が引き継ぐこととなった。

そのため、陣地用地は自衛隊に譲渡され、市では公園の代替地の確保を進めていった。しかしその後、国際情勢や軍事状況の変化によって、一九六六(昭和四一)年には自衛隊の高射砲陣地も廃止され、用地返還の上公園としての整備が本格的に行われることになった。ただし、岸根公園に関しては、高射砲陣地以外の部分が米軍兵舎や野戦病院として使用されており、それらが最終的に返還されたのは、一九七二(昭和四七)年のことであった。

以上のように、横浜と戦争の関わりを考えると、横浜にあった様々な軍施設、そして横浜に拠点を置いた実戦部隊の存在に改めて気付かされる。しかも、戦後も占領を通じて、かたちを変えながら継続されているものもあるのである。横浜の現代史にとって、これらの持つ意味は大きく、現在の街づくりにも大きな影響を残している。今後、横浜にあった軍施設について、戦前から戦後にかけての詳細を、一つ一つ明らかにしていく必要がある。

行の都市計画公園として整備が進められた。一九二六(大正一五)年には、第一期工事が完成、開園し、翌年一月一八日、市に引き渡された。その後、第二期工事として洋風庭園の整備工事が進められたが、一九四二(昭和一六)年八月、陸軍に接収され、高射砲陣地が構築された。これは、先の防空部隊展開と時を同じくしている。



野毛山高射砲陣地にて 昭和17年初め  
清水信資料(横浜市史資料室所蔵)

戦後しばらくの間、これら三公園は米軍に接収されることもなく、高射砲陣地を解体して公園整備を行い、あるいは家庭菜園として利用するなどされていた。ところが、一九五〇(昭和二五)年末になって、朝鮮戦争の勃発にともない、再び高射砲陣地とするた